

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

《理工農系》

●東京大学情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻

「大学連携による ICT リーダーシップ教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムでインターンシップを単位と認める機会を学生に提供し、それによって実施されたインターンシップは相当数あったものの、それらの多くのインターンシップは学生が指導教員との協力関係のもとで見つけてきたものが多く、本プログラムとして提供したインターンシップの機会は十分とは言えなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

従来、インターンシップの機会の多くは学生と指導教員との協力関係の元で提供されることが多く、また企業からのインターンシップの可能性についての照会は大学ではなく研究室に行くことが多い。それにより幅広いインターンシップ機会の収集と、それに関わり合いたい学生のマッチングを実現できなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

教員に対してインターンシップ機会の提供や情報共有を幅広く求めたのだが、それらの機会はそれぞれの教員の研究室の学生に割り当てられることが多く、本プログラムとしては十分な機会を提供できなかった。相当数のインターンシップが実施されたとはいえ、学内でインターンシップの機会を探す方法が誤っていたのかもしれない、学外の企業に対して幅広くインターンシップの機会を求めるべきであったかもしれない。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

E. 学習・研究環境の改善

④ICT 技術を利用した遠隔教育の推進

《理工農系》

●東京大学情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻 「大学連携による ICT リーダーシップ教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

円滑な遠隔講義を実現するためにハイビジョン対応のシステムを導入し、それらは大学間の授業交換で大きく活用できたが、その運用体制を整えるのが困難であった。具体的には、(1)授業を実施する教室における遠隔講義システムの操作、(2)授業を受ける側であるリモート教室における遠隔講義システムの操作、(3)2教室間における問題発生時の連絡体制の整備の三点が問題となった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

遠隔講義が無い状態では、授業を実施する教員は自らが存在する教室だけマネジメントすれば良いが、遠隔講義システムを利用した場合、遠隔講義システムの操作やリモート教室の状況の把握など、教員の担当する作業が増加するのが主な要因である。具体的には、東京大学から慶應義塾大学に授業を配信する場合、その授業そのものは東京大学でも実施されており、東大側の教員は遠隔講義システムの操作や運用に気を配る余裕が十分でない。遠隔講義システムそのものは、双方の大学の学生があたかもそこにいるかのように見せられるものであったが、その運用を誰がやるべきなのかが不明確であった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

問題の解決方法として、遠隔講義システムを操作する要員を双方の教室でTAとして採用し、遠隔講義システムの操作と授業実施教室とリモート教室の連絡をお願いした。これにより、教員の手を煩わせることなくこれらの問題を解決できたが、TAの雇用が発生したことによるコスト増は問題として残されている。